『瓜姫』の昔話をめぐって

上野　泰子

昔話とは、何百年もの歳月に耐えて、民衆の間で口伝えされてきた物語が、あらためてよばれるときの呼称だと思います。ですから、どの物語も長い時の流れを経てはじめて、昔話たりえるのでしょう。ところが、優れた昔話の中には、その物語が生まれ出た瞬間から、その物語を昔話たらしめている力があると感じることがあるのです。確かに、昔話は時代の推移とともに、語られる土地の移動とともに、様々な変化を試みてきましたし、文字化の洗礼を受ければ、記録者の手によっても改ざんを加えられてきました。けれども、それらの外的な要因によっては変わらない、変わらない故にますます輝いてくる核のようなものが、昔話にはあるのではないでしょうか。また、それらの核を中心に包みこんで口伝えしてゆく伝承の形態の内にも、自己の昔話らしさを保持してゆこうとする、すたれぬ力があるように思います。その力のことをA・アールネは昔話の「内的生命力」とよ

び、小沢俊夫は「形式意志の力」とよんでいます。

いま、ここにひとつの例として、『瓜姫』（もしくは『瓜子姫』）の昔話を取りあげてみたいと思います。この昔話は、東北から九州にいたるまで広く採話されており、『日本昔話集成』（関敬吾）には百余例が収められているようですから、それらの資料をもとにすれば、物語の基本的なモティーフはかなり明らかに抽出することができます。左の表の上段にモティーフ、下段にそれぞれのモティーフを効果的に盛りあげている、代表的な語り口を整理してみました。

1	婆が川で瓜を拾う。	……瓜の流れてくる音
	瓜から姫が生まれる。	〃ドンブ、ドンブ〃など
2	美しく成長して機を織る。	……機織りの美しい音
		〃じいさんサイがね、ばあさんクダがね、ギッコンバッタリコ〃
3	爺婆の留守にアマノジャクが来て、姫を襲い、木に縛りつける。	……アマノジャクと姫の問答
		〃指一本はいるだけあけておくれ〃
4	アマノジャク、姫に化けて機を織る。	
5	瓜姫の評判を聞いた殿様が妻にしようとして、アマノジャクが化けたものとしらず輿にのせてゆく。	
6	鳥の声で化けの皮がはがれる。	……人に似た鳥の声
		〃瓜姫ののりてゆくべき玉の輿アマノジャクこそのいてゆくらむ〃
7	アマノジャクは殺され、その血でソバやカヤの茎が赤く染まる。	

これは、もとは西南の地方で多く採話された型のものですが、現在昔話絵本などに主に採用されているのはこの型だと思います。他に変型として、瓜が畑からとれるもの、アマノジャクが山姥となっているものもあります。また、東北地方には、殿様が登場しないで、機の音や鳥の鳴き声から、あるいは瓜姫の食べる様子から異変を知って、爺婆が姫を救け出して終わる型や、姫が殺されてしまって仇討ちとしてアマノジャクが殺される型のものが多いようです。

昔話に大変多いパターンは、何といっても異常な出生→偉大な事業→幸福な結婚ですから、先に表にした西南地方の型の方が、昔話として完成度が高いといえるかもしれません。ただ、このような表にしてしまうと、例えば4のところでアマノジャクの機の音はどこに消えた、5の殿様が現れたとき、爺婆はどうした、とか気になって、物語としては殿様が現れないで終わるものの方が、よほどよくまとまっていると感じます。もっとも、これもあえて表化したからなのであって、語り聞かされていれば、〃殿様が迎えに来たそのとき爺婆は…〃などと説明されては、かえってうるさくて困ります。

語り聞かされていれば、殿様が出てこなくても、何かが欠落した感じは少しもしない、それなりに前半の部分がよく盛りあがって感じられる、殿様が出てくれば、それはそれで新たな発展となり、お話しに深みが増す、といったところだと思います。いずれの型にもそれぞれのポイントが認められ、その要所をいかにして印象的に盛りあげるかという点で、語り手の工夫がみられます。このように、昔話は語り手によって、どうしてもある要素が忘れられたり、付け加えられたり、置きかえられたりされがちなものですが、語りの流れの中では、それなりに形を整えられて、昔話の自然な形を保ちつつ伝えられてきたものだと思います。

では、ここで目を転じて、語りによってではなく、文字によって読まれたものの場合はどうでしょうか。

記録された瓜姫の物語で現在残っているものには、『嬉遊笑覧』巻九、お伽草子の絵巻「瓜姫物語」、柳亭種

彦の絵草子「昔話きちちゃんとんとん」があります。中でも広く読まれた可能性がもっとも高いのは、やはり最後の、「修紫田舎源氏」という当時の大ベストセラー作家による絵草子だと思いますので、これを取りあげてみたいと思います。その序によると、種彦は、「越の国人に聞きしとて、むすめ豊が物語る童話三つ四つ」のひとつを、「きちちゃんとんとんの、おはなしせう」とつねにいうままに標題した、ということです。もとの昔話よりかなり長いのですが、同様に表にしてみました。ただし、下段は補足としました。

1	武蔵国入間郡に正直夫婦、隣りに悪太郎	……それぞれの性格、生活描写。悪太郎のはやしことば
2	正直かかが川で洗濯していると二つの香箱が流れてくる。一つはかかに。一つは悪太郎に。	……〝実のない香箱そっちへ行け、実のある香箱こっちへ来い〟
3	悪太郎の箱から天の邪鬼かかの箱から機を織る小さき姫が出る。つくづくながめていると……すらすらと大きくなる	……〝きらちゃんとんとん〟とほのかに機を織る音 ……〝我は呉羽（くれは）というものなり〟
4	呉羽姫、機を織り、夫婦に財を成させる。	……対して天の邪鬼の悪者ぶり。
5	夫婦が留守のすきに	……夫婦は姫に教えられた場所に野老（ところ）をほりに行った。
	天の邪鬼が姫を襲い、柱に縛りつける。	……〝あなむざんやな姫を肌着ばかりにはぎとりて〟
6	天の邪鬼、姫に化けて機を織る	
7	夫婦、帰宅してこれを見つけ姫を助け出す。	
8	同じ日に悪太郎が盗みに来たが様子をみて逃げる。	
9	毘沙門天が現れ、悪太郎をこらしめて去る。	……これまでのことは、全て村人を正直道に導くため。
10	姫は后裏に召される。	

村は野老沢と呼ばれる。

まず一読して、物語としてつじつまの合わないところはないと思います。構成について種彦は序で、〃竹取物語と桃太郎を合わせたる如く〃と述べていますが、発端の部分は確かにそれらの昔話に共通するモティーフに違いありません。全体のストーリーの流れは、最後の毘沙門天の場面を除いて、ほぼ先にあげた伝承の瓜姫と一致していると思います。

次に細部ですが、明らかに昔話的でないと感じられるのは、〃昔々あるところに〃でなく、場所を限定している始まり、人物の詳しい描写。悪太郎と天の邪鬼、という二重の構造などの点です。けれども、〃実のない香箱そっちへ行け、実のある香箱こっちへ来い〃という悪太郎のはやしことばは、典型的な瓜姫の昔話にこそ出て来ませんが、『舌切り雀』で欲深な婆が大きな方のつづらを選ぶ場面などが思い出されますし、リズムもいかにも語りらしく思われます。そして、〃きちちゃんとんとん〃とかすかなる音のして、一寸ばかりの姫が機を織っている様、取り出せばすらすらと大きくなる様なども同様です。このような細部に至るまで、今日にまで伝わる伝承の昔話とよく一致しているものだと思います。おそらく種彦は、この物語の魅力が何処にあるのか、よく直観していたに違いありません。彼も戯作者の立場を忘れて、娘とともにこの昔話に聞き惚れたことがあって、その経験が期せずして彼に、グリム兄弟の再話に通ずる立場を取らせたのではないでしょうか。また、露骨な勧善懲悪や霊験譚を加えた点について種彦を弁護すれば、彼なりに、この古風な物語が当世の人達に受け入れられるようにと、腐心した結果なのだと思います。

絵草子の全編には五雲亭貞秀による挿絵が添えられていますが、呉羽姫が大奥のお女中か大名のお姫様みたいな様子なのが、私にはおかしく感じられます。この点ももしかすると、現代の一部の昔話絵本の背景にある配慮と似たものかもしれません。貞秀が仮りに現代の人なら、今の子ども達のために彼らの好みそうなマンガ的な表現で、まず絵によって子ども達の目を魅きつけようと試み

るのではないでしょうか。

ところで、種彦によって絵草子にされることで、かなり複雑になったこの物語も、娘豊の感受性には、ただ〝きちちゃんとんとんのおはなし〟と、機織りの音に集約されてしまったところに、別の興味をおぼえます。豊が何歳だったのかは分りませんが、彼女の心には何よりも強く、この軽やかな機の音が印象的に響き、まるでこの昔話のバックグラウンドミュージックのように思われたのでしょう。関敬吾によると瓜姫の昔話のテーマは成女式で、機織りは婚姻の資格である、ということですから、豊の聞いた音はまさしく、物語の内にあって失われることのなかった昔話の核心の音、といえるのではないでしょうか。実は私にも子どもの頃、同じ瓜姫の昔話を聞いて、似たような思い出があります。私の聞いたものは、始めの表にした西南地方の型のものでした。その話のうち、冒頭の部分は『桃太郎』に、最後の輿入れの部分はグリムの『灰かぶり』（シンデレラ）に吸収されてしまって、瓜姫の昔話と聞いて思い浮かぶのは、瓜姫とアマノジャクの場面ばかりでした。題のことも、「アマノジャクと瓜子姫」とよんでいたと思います。

唐突なようですが、その頃、私は鬼というものをよく知っていました。それは春秋のお祭りに出てくる、村の〝若けえし〟が扮する鬼のことでした。ことに私の家の隣りが、〝瀬の神〟とよばれる、神木のある丘で、大昔祠のあった岬の名残りとて、鬼達のたまり場でしたから、赤黒や墨黒の面をかぶった鬼達が子ども心にどんなに恐かったか、よくおぼえています。大人と一緒の時は平気なのですが、ひとりの時は、まるで吠えつく野犬のそばでも通るような心地がしたものです。反面、そのような鬼の出る日こそ、私にとって一番の晴れ着を着せてもらえる日でもありました。袂の長いきれいな着物が晴れがましくて、喜んで表へ出るのですが、そんな格好をしていると、よけいに鬼が脅すものですから、（からかっていたのでしょうが）本当に困ってしまいました。

さて、ベッテルハイムは、『昔話の魔力』の中で、くりかえし、子どもがそのとき無意識のうちにもっている

もっとも切実な問題を昔話の中に見つけ、その子にとって意味のあるメッセージを引き出してくることが重要なのだと述べています。そして、昔話が非常に象徴的な、受け手によってどのようにも解釈できる性質をもっているからこそ可能なのだと。私の場合、私の幼い無意識の中に、どのような切実な問いが潜んでいたのかは知る由もありませんが、瓜姫の昔話を聞かせてもらいながら、自分の知っている鬼のことをあてはめて、自分勝手の空想を広げつつ、子どもなりに答えを捜し求めていたのだと思います。そして、私にとってこの昔話がアマノジャクと瓜姫の場面に集約されていたということは、そこにこそ、私の幼い心の問いの核心があったからにほかならないと信じています。

私の個人的な経験に触れることが長くなりましたが、私の場合にしても、豊の場合にしても、子どもがその子の内的な必要によって作りあげたイメージこそ、その昔話の、その子における意味なのだという、ベッテルハイムの指摘はあたっていると思います。小沢俊夫は、子ども達がそのような、昔話との真の出会いを体験するためには、是非とも「語り」という手段を通して出会うことが大切なのだと述べています。なぜなら、昔話は多くの語り手によって、長い時間にのせて語り伝えられているうちに、語るのにちょうど良いように磨きぬかれてきたのだからと。確かに自分独自のイメージを構成してゆくためには、なるべく視覚のような、強烈に意識を限定させてしまう感覚によらない方が良いに違いありません。

その意味で、最近の昔話が子ども向けに再話され、さかんに絵本化されたり、TVの番組化されたりしている傾向をいま一度見つめ直す必要があると思います。同じ再話といっても、昔話が生活にまだ脈々と息づいていた「きちちゃんとんとん」の時代とは条件が違います。語りとしての昔話がすたれてゆく一方の現代にあって、このような手段をのみ通して、本当に昔話の子どもの心にくいこんでゆく力が失われないものなのか、なおも昔話らしい伝承の形態が保持されてゆくものなのか、はなはだこころもとない気がしてなりません。